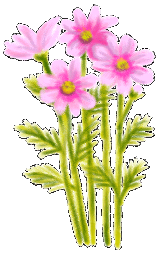
宮田中だより 2023年 10月号

+4

電話 045-331-5288



「 読書の秋 」

生徒指導専任　澤上　朋弘

芸術の秋、スポーツの秋、過ごしやすい季節になってきましたが、寒暖の差もあり、新型コロナウイルスやインフルエンザの予防にも引き続き努めてほしいところです。さて、学校では現在、文化祭（合唱の部）に向けて、毎日のように各クラス練習に励んでいます。その中で、やはり３年生の取り組みには熱い想いを感じます。１・２年生も３年生に負けないくらいの元気の良さでクラスの団結力を高めると共にそれぞれの目的に向かって切磋琢磨してほしいと思います。

今日は、「読書の秋」にちなんでこんなお話を紹介します。

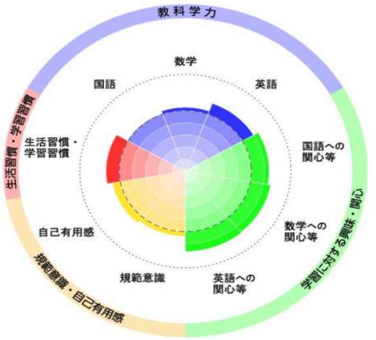
学ぶことと読書とは、どういう関係にあるのか？学ぶことから読書を除いたら、学ぶことが小さくしぼんでしまう。つまり、学ぶことの中で読書は大きな部分を占めている。書籍の一形態である教科書がない学校がイメージしにくいことを考えればいい。では、なぜ学びの中で読書が大きな部分を占めるのか？それは、人類がこれまで蓄積した知的遺産を最も効率的に学ぶことができるのが本という形態だから。 年々、読書人口は減少している。実際、2014年2月、読書時間がゼロの大学生の割合が4割を超えたという調査結果が報じられた。まったく本を読まない大学生が4割を占めるということだ。 本を読むという行為と、テレビを見るという行為を比べてみよう。どちらも情報をインプットする行為である。だが、同じインプットといっても、そこには大きな違いがある。テレビは基本的に受け身であり、受動的で消極的な娯楽にすぎない。一方、読書は「決して受け身ではあり得ない」「能動的で積極的な精神の営み」である。 文学者の江藤淳氏は、「読書とは、人類が享受している『現段階で考えられるベストな到達点としての知性』を獲得しようとする行為」である、と。ドイツの初代宰相のビスマルクは、「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」と言った。頭の悪い人は、自分の経験からしか学ばない。頭の良い人は自分の経験だけでなく、他人の経験からも学ぶ。他人の経験の蓄積が歴史（＝社会的教訓）であり、それは本で最も効率的に学べる。もちろん、自分の経験からも学ぶことは良いことである。自分の経験から学ばない人は論外であり、頭の悪い人以下である。

『学び続ける理由　９９の金言と考えるベンガク論』戸田 智弘 著／ディスカヴァー

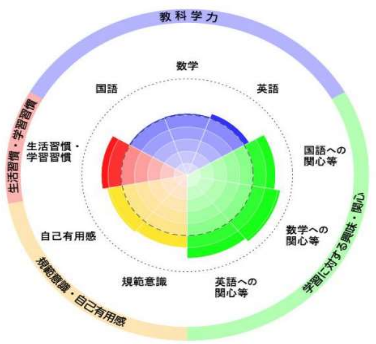
今から約５０００年も前から本は存在するといわれています。そして、現代でもその本の内容は受け継がれ愛読している人もいるようです。では「人類がこれまで蓄積した知的遺産を最も効率的に学ぶことができるのが本」だとするならば、本から学ばないのは効率が悪いと言わざるを得えません。しかも「学びの中心は読書」であるならば、読書をしない人たちは、まったく学んでいないということになります。人生100年時代を、「受動的な楽しみ」だけを求めて、一日の大半をスマホに使ってしまったとしたら、楽しい刺激は受けることはできても、学びを得ることはできないでしょう。逆に、読書は「能動的な楽しみ」です。知らなかったことを知る楽しみや知的好奇心を満足させるための愉しみがあるのです。「学びの中心は読書」という言葉を胸に刻みたいものです。

令和5年度　宮田中学校全国学力・学習状況調査結果（全国・神奈川との比較）

生徒質問紙（全国基準）



生徒質問紙（神奈川基準）



（1）生活意識調査

【分析】

『自分にはよいところがある』という質問に対して、85%以上の生徒が肯定的に答え全国平均を大きく上回っている。学校での生活に楽しさを感じている生徒が多く、自分とは違う意見について考えることの楽しさも感じている生徒が多い。また、ICT機器を活用して学習することの利便性を大きく感じていることがわかる。

家庭での学習習慣は全国平均をやや上回っているが、『将来の夢があるか』という質問は全国平均を下回っている。『地域や社会をよくするために何かしてみたい』という生徒は全国平均を上回り多いが、そこから自分が将来やりたいことに結び付けて考えられていないことが考えられる。

【課題に対する改善の手立て】

子どもたちの楽しさを大切にする指導を継続する中で、自分の長所・課題と向き合えるような場面を振り返り等を通して作る。そこから自分を知り、中学校卒業後・それ以降の進路で自分がどのような道を進んでいったらよいのかを考えるきっかけをつくり、支援していきたい。

（2）国語

【分析】

「知識・技能」、また「思考・判断・表現」の両観点とも、本校の結果は全国や神奈川県の結果と比較して大きく差異はなく、全体的に平均的な能力を有していると言える。その中において「知識・技能」の観点における「情報の扱い方に関する事項」に関しては、全国・神奈川県の両平均より約3．5%上回っており、これは日頃の学校での学習において、タブレット端末等、ICT機器を積極的に活用していることの成果である思われる。しかしその他の「知識・技能」の観点の中の事項（「言葉の特徴や使い方に関する事項」、また「我が国の言語文化に関する事項」）においては、全国・神奈川県をやや下回る結果となっている。

【課題に対する改善の手だて】

全体的な正答率は、全国・神奈川県とほぼ同様の結果となっているが、「知識・技能」の観点のうち「情報の扱い方に関する事項」以外の事項がやや低い傾向にあるため、日々の授業における漢字の学習等、基礎的な力を身につけさせる指導を丁寧に行っていく必要がある。小テストの実施等で生徒の状況を細かく把握し、それを指導に生かした授業を行うことで、基礎学力の一層の定着を図りたい。

（3）数学

【分析】

生活調査から、数学に関する興味や数学が大切であることの認識は全国平均を大きく上回りとても高い。問題の調査結果では、全国や神奈川県の結果と比較しても大きく差異はなく、全体的に平均的な能力を有していると言える。領域別にみると、『図形』の領域の正答率が全国や神奈川県より高く、『関数』の領域の正答率が全国や神奈川県より低い。

【課題に対する改善の手だて】

世の中の事象に当てはめた問題になると正答率が下がっているので、それぞれの単元がどういったものに使われているのかを知り、理解できるような授業の工夫を心掛ける。また、既習事項の復習を忘れず、関連して出てくる内容の確認をすることで継続的な理解を促していきたい。

（4）英語

【分析】

生活調査では、英語に関する興味や取組状況が全国平均を上回っている。

調査結果でも、どの領域も全国・県平均を上回っており、意識の高さに比例していた。ただ、「書くこと」における記述式（まとまった英文で答える問題）は全国平均と同程度であったので、やや苦手であると分析できる。

【課題に対する改善の手だて】

これからも、生徒が英語学習に興味をもって取り組める授業づくりを展開していく。

今後の学習内容では、パフォーマンステストや単元ごとの振り返りを継続的に行い、基礎的知識の定着を図る。また、英作文の機会を増やしたい。